

私と俳句

加龍 恵子

あれは確か山楽会の帰りだったでしょうか。中野陽典さんのタクシーに同乗させていただいた時のこと、友達が俳句入会の話を始め、「加龍さんもどうや?」とおっしゃいました。私はびっくりして、「俳句? とんでもない。言葉探しに追われて、美味しいご馳走も味がしなくなるわ。」と車窓に顔を背けました。それでもその一言に導かれるように、私もいつの間にか俳句会に入れていただいていたいました。

最初の吟行は夏休みの母校でした。季語のぎっしり書かれたプリントをいただき、その後もそれはファイルに挟んで、いつも重用しています。

その頃、子供たちが私の喜寿のお祝いに何がいいかと聞きましたので、「歳時記を頂戴」と言いました。ずっしりと重い歳時記、春、夏、秋、冬、新年の五冊がすぐに届きました。不勉強な私は、兼題をいただくごと歳時記を開け季語を探し、今日まで細々と俳句を続けさせていただいています。

もう車も自転車もとっくに乗れなくなって、今は風を受けて歩くことが一層楽しくなりました。外に出ればツバメは青空にすっと飛び込み、ハナミズキは「私の季節よ。」と言わんばかりに花びらを広げてくれるのです。

お仲間は「俳句は年取ってからいいよ、寂しくないの。」とか、腰痛で動きにくくなった方は「歳時記で季語を探して俳句を作るのが楽しみ。」とか、入院された方は「俳句をしておいてよかったわ。」と、その思いをかみしめて今、私は庭のない玄関先のプランタで、草花を育て四季を知り、食卓に歳時記を積んで美しい言葉の数々を味わっています。

